

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～



【「これ、なんだ?」「なんだ、これ?」「どうやってみようかな?」「こうしたらどうなる?」 ～保育者が遊び方を限定しないわけ～】

1歳児の様子

11月12日(火)、1歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。戸外遊びは絶好の秋日和でした。園庭には、園庭にある木の落ち葉では足らずに、近くの公園や道路からも集められ、いろいろな形状や色の落ち葉が入り混じる『落ち葉じゅうたん』がありました。『落ち葉じゅうたん』の中をよく見ると、どんぐりやまつぼっくりも入っていました。また、遮光ネットのすき間を利用して、園庭にはないススキが挿してあり、



『秋を感じられる環境』が工夫されていることがわかりました。もちろん、砂場遊びやコンビカー、滑り台など、普段から遊んでいる遊びも楽しめるように準備されていました。

園庭に出てきた子どもたちは、自分のしたい遊びに一目散で走っていったり、目に入ったものを触ったりして、思い思いに遊ぶ姿がありました。

『落ち葉じゅうたん』では、落ち葉を踏むと音が鳴ることに気づいたり、落ち葉をお皿に乗せて「はい、どうぞ」と渡したりして遊ぶ姿がありました。すると、A児が、茎のある大きな葉っぱをもち、「おっ!」と声を出しました。また、木の枝を手に取り、砂地面や土面に書けることを楽しんでいました。すると次は、滑り台に書きに行く様子がありました。『何かを書く』ではなく『書くという行為を楽しむ姿』のように感じました。A児は滑り台に何かを書くことに夢中になっていました。A児の提げているカバンに入っていた落ち葉が落ちていたことに気づいたB児が、持っていたススキで掃く姿がありました。そんな二人の姿を見て、保育者は「掃除しているのね～」と行為を言語化して伝え、B児は「そうじ!」と嬉しそうに言っていました。



その言葉にA児はB児のもっているススキを見て、また、「おっ!」と声を出したのです。「あそこにあるよ」と声をかけられ、ススキを手にしたA児は、ススキの穂ではなく、棒(茎)に興味を示していました。振り回したり、挿したり抜いたりすることを楽しんでいました。

A児の2度の「おっ!」は、「大きな葉っぱ」「ススキがフワフ

ワだ！」「フワフワで掃ける」ではなく、「葉っぱに棒（茎）が付いている！」「フワフワに棒（茎）が付いてる！」の発見の声であったのではないかと感じました。

保育者は、「こんな環境を整えると、子どもたちはどう遊ぶのだろうか？どんな遊び方をするのか？」と子どもたちの姿を想像しながら、ワクワクして環境を整えます。安全面を考慮すると、遊び方を一定決める必要がある時もありますが、それも子どもの遊び方や姿を見てから考えることが大事になります。遊ぶ前、子どもが興味をもつ前から、「この遊びはこうやって遊ぶものです！」「その玩具はこう使います」と遊び方を先に教え込み、言われた通りに遊ぶだけでは、子どもの主体性は育ちません。また、文部科学省が標語にしている『遊びは学び 学びは遊び “やってみたいが学びの芽”』であるように、遊びを通して、子どもたちの「これなんだ？」「どうやってみようかな？」「こうしたらどうかな？」など、興味をもったり、遊び方を考えたりすることこそが『学びの芽』であり、『そだちのねっこ』であると思っています。

1歳児の子どもの発達段階を踏まえて、やっていることを言語化して、発語に促していくことも大事な保育者の役割です。また、子どものやっていることを真似て、一緒に遊びながら、子どもが何を面白いと感じているのか、何を考えているのかを探ることも大事になります。

保育者が遊び方を限定しないのは、子どもの姿や声に耳を傾け、“やってみたい気持ち”や“気づきからの興味”に寄り添った保育者のかかわりの中に、『子どもの主体性を育むこと』が含まれているからです。

今回のエピソードを、【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】に関連させてみると、『健康な心と体』『自立心』『自然との関わり・生命尊重』につながる芽生えがありました。



3 年次研修③

令和6年11月8日（金）午後3時30分～午後5時に3年次研修③を行いました。講師は一般社団法人クアトロライフナレッジプロジェクト 杉下 洋二 代表理事で、研修テーマは金融教育研修「心とお金の教育について学ぶべき大切なこと」です。

<受講者感想>

- 金融教育を行うことになった経緯として、国際的に日本が金融に関する知識が少ないことが関係していることを初めて知った。ただ貯めるだけでなく、目的別にしたり目標たてたりすることだけでも、お金のたまり方、見方が変わると思った。また現在の銀行の仕組みと昔の銀行の仕組みが違ふことが大きく作用していることも理解した。それに加えて、物価の高騰や、税金の引き上げなどでお金の方に変動があることを分かった。お金に関する歴史的な変化を理解し、子どもにも伝える必要もあると感じた
- 投資の基礎的な知識をつけることができ、自分の生活や将来について考えることができた。学びたいと思っていたことなのでよかった。また、お金は生活と密接に関係しているので、お金との付き合い方を子どもたちに伝えていく必要があると感じた。お金の使い方がわかっておらず、貸し借りのトラブルや、多額のお金を使ってしまう子がいるので、お金の気持ちを考えるということを子どもたちとやってみたいと思う。
- お金との関わり方について、改めて考える機会になった。仰られていた通り、近年金銭に関わるトラブルやニュースは多く、子どもたちにもその波は来ているように感じる。どのようにお金のことについて考えさせるか、またどのような考え方と結びつけると子どもたちにも上手く理解できるのか、まだまだ自分の中で正解は見つからない。今回のお話に関しても、複利や投資を行うメリットは理解できたものの、それらの落とし穴は何なのか、見極めれば得であるのにまだまだ広まっていないのは時間が足りないからなのか、広まりつつある過渡期であるのか、それとも広まらない理由があるのかなど、数々の疑問が湧いてきた。現実的な話であるからこそ、いい話も悪い話も交えながら、しっかりと理論付けて納得できるような教育を行っていきたい。

主席研修②



令和6年11月11日(月)午後3時～午後5時に首席研修②を行いました。講師は大阪教育大学 陸奥田 維彦 特任教授で、研修テーマは「学校組織力の向上「チームとしての学校」について」です。

←研修資料の一部

<受講者感想>

- このような様々な理論を知る機会があって、とても参考になった。他の先生方のことを知っていることもあれば、案外知らないことが多いと実感した。改めて知っていくようにしようと思った。組織の要は人であることを再認識できてよかった。
- 首席には責任だけでなく、権限もあるということがよく分かった。学校のためになることは管理職にも意見具申を行っていききたい。そのためには、学校の現状をもっとよく理解し、問題点や強みを知る必要がある。日々の業務の中で、そういう点に気を付けていききたい。
- 今回の研修で首席の仕事やリーダーシップなどについて再確認ができた。また何をすべきか見えてきた気がする。「目標を知らないと達成できない」という言葉がまさしくその通りだと思った。自分自身は勿論のこと、他の先生方も、目標を意識していけるようにしていきたい。

特別支援教育コーディネーター研修④

通級指導教室担当者研修⑧・特別支援教育研修②

令和6年11月12日(火)午後3時30分～午後5時に特別支援教育コーディネーター研修④・通級指導教室担当者研修⑧・特別支援教育研修②を行いました。講師は大阪大学大学院 片山 泰一 教授で、研修テーマは「発達障がいを理解し、子どもたちの学びを支えるために」です。

<受講者感想>

- 「当たり前を見直す」という言葉に、日々の保育を振り返って、反省すべきところがたくさんあると感じた。子どもの発達は一一人ひとり違うので、しっかりとその子どもをみて、なぜ困った行動が起こるのかに注目しながら支援方法を考えていききたいと思った。
- 医療分野から見た発達障がい、発達神経症の流れを復習することができた。また、包括的な流れになっていることがすごく納得できた。発達障がいだから、ADHD だから、ではなく困りごとがあるなら公正な手立てを取り入れるというのが教育の現場に適していて、すごく共感できた。
- 「脳の認識の違い」の話がとてもインパクトがあった。自分の当たり前が当たり前ではない、と頭ではわかっている、つい自分の当たり前にはめてしまうことがある。みんなもきっとそうだろうと思ってしまい、子どももそれに当てはめようとしてしまうことがある。もう一度認識を改め、アセスメントを意識して、子どもたちの成功体験をたくさん積めるような学級の雰囲気や運営を心掛けたいと思う。

道徳授業づくり研修②

②問題解決的な学習の作り方

- ①道徳的価値の大切さがわかっていない。
- ②道徳的価値の意味を誤解している。
- ③道徳的価値の大切さはわかっているけど、できない（迷っている）。
- ④価値と価値が対立している。

令和6年11月15（金）午後3時30分～午後5時に、道徳授業づくり研修②を行いました。講師は大阪体育大学 高宮 正貴教授で、研修テーマは「道徳的価値の理解を深める授業づくり～教材理解と発問の工夫～」です。

←研修資料の一部

<受講者感想>

- ・道徳の授業を作る時に、まず内容項目の理解を深めようと読んでみたが、理解しにくい内容もあった。今回の研修では、内容項目を読み解きながら実際の発問作りができたので、わかりやすかった。
- ・価値理解と人間理解、教材テーマ、価値テーマなど、道徳授業にまつわる理論を詳しく知ることができた。
- ・道徳の発問を作るのが苦手だったので、今日そのプロセスを詳しく学ぶことができた。学習指導要領を熟読し、道徳的価値を深く考えて授業づくりを行っていきたい。

幼児教育研修<ミドルステージ研修②>

令和6年11月15日（金）午後3時～午後5時に幼児教育研修<ミドルステージ研修②>を八尾市水道局4階大会議室で行いました。講師はキッズいわき・ぱふ 岩城 敏之 代表で、研修テーマは「乳幼児期に育てたい非認知能力」です。

<受講者感想>

- ・子どもたちが「世の中で幸せになる方法」を頭に置くことで、かける言葉、用意するもの、かかわり方が変わっていくと思った。
- ・十人十色の姿を認め、人とのつながりを大切にしながら得意なことを伸ばせるような場面を増やしていきたい。
- ・心が動いて体が動く。子どもの心が動かせる言葉がけや提案などを増やしていき、子どもも保護者も幸せになれるかかわりをしていきたい。

プログラミング研修②

“かまど” による炊飯

ご飯を炊くには、薪を割り、火をつけ、はじめチョロチョロなかパッパ、ジュウジュウ鳴いたら火をひいて、赤子泣いても蓋とるな。

自動化されていない昔前の生活技術。この一連の動作を体験することにより、論理的思考力は身についたのではないかな。



令和6年11月19日（火）午後3時30分～午後5時にプログラミング研修②を行いました。講師は大阪産業大学 山田 啓次 教授で、研修テーマは「プログラミング教育の推進について」でした。

←
→
研修資料の一部



＜受講者感想＞

- 今年度、勤務校でもプログラミング学習に取り組んでいるので、知っていることもあったが、初めて知ることも多く参考になった。活用できそうなところは実践していきたい。難しいプログラムの方がいいかと思っていたが、簡単なもので、試行錯誤させることで、何度も挑戦していく気持ちや、プログラミング的思考が育つことが分かった。
- 今日の研修の中で、普段子どもたちと使っている教材やアプリケーションの話をして交流することができた。どのように使用するのか、どのような学年に向いているのかなどを改めて知ることができた。また、小学校におけるプログラミング教育のあり方などを再認識することができ、もう一度プログラミング的思考について考えていきたいと思った。
- 先生の実践の話も興味深く聞かせていただいた。古民家で自分のクラスの生徒にもかまど体験をさせてみたいと思った。できるなら、野菜を育てる機材を一度お借りして、1年生の自分のクラスでもやってみたい。

中学校英語授業づくり研修

令和6年11月22日（金）午後3時30分～午後5時に中学校授業づくり研修を行いました。講師は奈良教育大学の 佐藤 臨太郎 教授で、研修テーマは「言語活動を充実させる手立て～主体的に対話しようとする意欲について～」です。

＜受講者感想＞

- 授業において、生徒たちにどのように英語の面白さや楽しさを伝えていけばよいか学べた。今後の授業で生徒たちが英語を楽しく使えるよう工夫していきたいと思う。
- コミュニケーションと明示的である部分をどのように両立していくかを考えることができた。わかったという安心感を持てる授業設計をしなければと感じた。
- 授業内でスモールトークをしても、うまくコミュニカティブに持っていくことができてなくて悩んでいたのが、今日来てくださった先生の会話の広げ方を学ぶことができてよかった。communicative practice と open communication の両方を取り入れていながら授業作りをしていきたい。

初任者研修⑦授業づくり7「八尾を学ぶ」



令和6年11月25日（月）午後3時～午後5時に初任者研修⑦授業づくり7「八尾を学ぶ」を行いました。初任者28名がA・Bの二班に分かれ、交互に徒歩で八尾市立歴史民俗資料館と心合寺山古墳を見学しました。この研修の目的は「八尾市の教職員初任者研修の一つとして、八尾の自然、文化、歴史について体験を通して学び、教員の資質向上を図る。」ことです。歴史民俗資料館では 舩曳 将仁 館長より、心合寺山古墳では本センター 松永 富希雄 指導主事より講義が行われました。

<受講者感想>

- ・3年生社会科の授業で、心合寺山古墳の写真を児童に見せたことはあったが、実際に訪れてみると、まず古墳の大きさに圧倒され、古墳・埴輪などが作られた歴史的背景や秘話など様々なことを学ぶことができた。「子どもたちの“わくわく”を引き出すには、まずは教師が“わくわく”できる体験をする必要がある」という講師の言葉がとても心に残った。今回の研修で、八尾市にはまだまだ私が知らない、子どもたちが知らない魅力がたくさんあることもわかった。自分自身も様々な地域について実地に学び、子どもたちの地域を大切に思う気持ちや、誇りに思える心を育てるような授業ができるようにしていきたい。
- ・今現在4年生を担当しているが、心合寺山古墳や大和川の付け替えについて授業を行ったばかりだ。実際に見たり、話を聞いたりすると、より一層学びが深まると実感しました。また、教える立場である教師自身が、実際に見たり話を聞いたりすることで八尾市の歴史的なすごさを感じ、それを子どもたちに伝えることで、子どもたちも「八尾市はすごいんだ!」ということを実感することができると思った。今後の社会科授業では、教科書やICTを活用したバーチャルのみで授業をつくるのではなく、できる限り現地に足を運び、そのままを伝えられる授業づくりをしていきたいと思った。
- ・八尾市は、歴史を勉強するにあたり非常に良いところだということを実感することができ私は八尾市出身でないのに、今回訪ねたような古墳や歴史民俗資料館が市内にあることを初めて知った。実際に行ってみると、想像以上に大きな古墳とたくさんの資料があり、社会科を担当しない身であっても心惹かれた。また大和川の付け替えに関しても、私が小学生のころ学んだ内容と変わっていたところもあり、教員が常に学びを更新していくことの必要性も感じた。八尾ってすごいところなんだと感じたこの感動を、ぜひ子どもたちと共有したいと思う。

ICT 活用のための基礎研修



研修資料の一部

- ・SUM関数
 - ・指定した範囲の合計を求める関数
- ・AVERAGE関数
 - ・選択した範囲の平均を求める関数
- ・LEN関数
 - ・指定した範囲の文字数を求める関数
- ・VLOOKUP関数
 - ・指定した範囲の中から特定のデータに対する値を探す関数

L-Gate：学習コンテンツの作成方法

1. デスクトップ内の「L-Gate」と書かれたショートカットを開く



令和6年11月26日（火）午後3時30分～午後5時に ICT 活用のための基礎研修を行いました。講師は本センター 生田 祐敬 指導主事と本市 ICT 支援員で、研修テーマは①Teams「新規クラス作成、PW 共同編集等」について②Excel「基本関数、表・グラフ作成等」について③L-Gate「基本操作等」についてです。

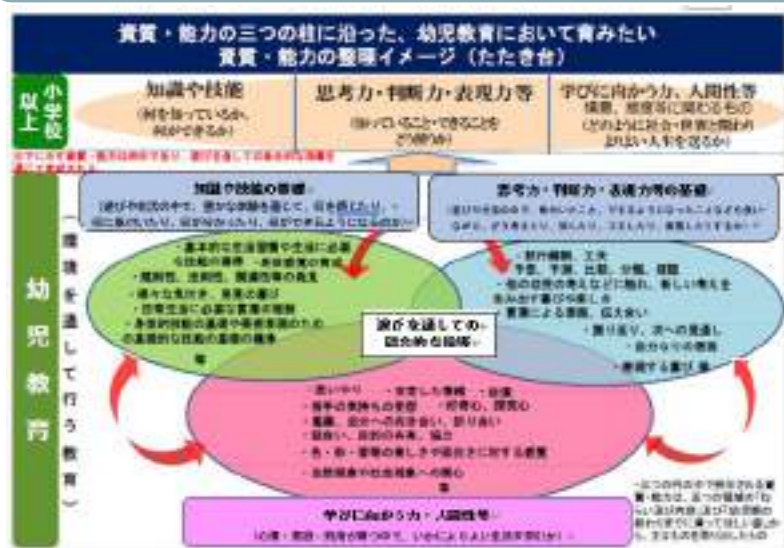
<受講者感想>

- ・疑問に思っていた部分が解決できた。VLOOKUP 関数や、L-Gate の使い方が十分理解できていない部分があったので勉強になった。今後の業務に利用できそうなツールであるということが実感できた。
- ・L-Gate へのコンテンツの追加について理解が深まった。事務の自分も教員のサポートがで

きる部分があると感じた。

- 基本的な使い方の紹介は、非常にわかりやすい研修だった。今後さらに深い内容の研修があればぜひ参加したい。今回の研修で学んだことは、校内でも広めていきたい。

幼・保・こ・小合同研修会③



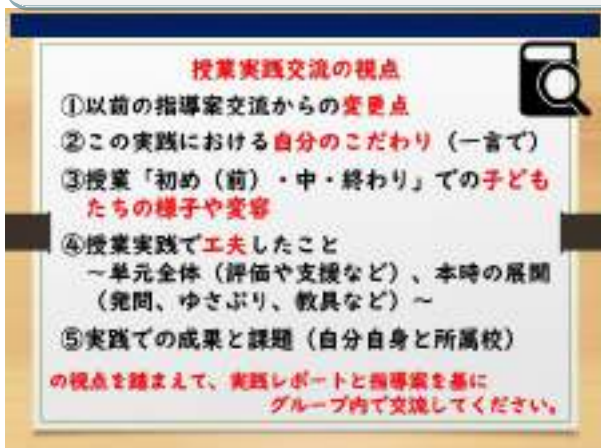
令和6年11月28日（木）午後3時30分～午後5時に幼・保・こ・小合同研修会③を行いました。研修内容はグループワークで、「授業、保育見学についての意見交換」と「交流計画試案の作成」です。

←研修使用資料

<受講者感想>

- 小学生と園児の交流計画案を作るための話し合いの中で、どのような援助が必要か、ねらいについても違った視点で考え合うことができた。その中で就学に向けての学びが多くあった。交流案の中で、実現できそうなものもあったので、今後さらに交流して実現してみたい。
- 年度末の引継ぎで聞いた話と、実際の児童の様子が違っていることがあるとの話を聞き、接続期に子どもの様子を見合ったり、連絡を取り合ったりできるような交流活動を実現していきたい。
- 保育見学や授業見学で感じたことを、グループの中で交流することで、自分の学んだことや大切にしたいことを明確にすることができた。就学前施設と小学校の交流について実際に指導計画をたてることで、子どもたちの実態をしっかりと考えること、子どもたちにつけたい力について考えることができ、とても有意義な学びとなりました。これから子どもたちとの学習にいかしていきたいと思った。就学前施設の先生方と話すことで、自由で柔軟な発想をもつことができたように思う。
- 就学前の子どもたちの様子を詳しく聞くことができ、子どもの姿を連続して考えることができました。園にいるときの方が子どもがいきいきとしているように感じ、小学校の学習でも、意欲的に楽しく参加することができるように、工夫を重ねる必要があると感じました。

10年経験者研修③



令和6年11月29日（金）午後3時～午後5時に10年経験者研修③を行いました。

講師は本センター 生田 祐敬 指導主事で、研修テーマは「授業づくり 授業改善の推進【検証】—今求められている授業—」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞

- ・グループ内のそれぞれの実践や指導案の交流を行うことで、教科を越えた新たな視点や考えに出会うことができた。主体的・対話的で深い学びに関して、ペアワークを行うことで、考えの共有を行うことができた。会話の中で得られる知識が、まさしく、「主体的・対話的な学び」だと感じた。
- ・生徒が社会に出ていったときに、問題や乗り越えるべき課題に当たったときに自らの力で探究し解決する力が必要だと思う。そのトレーニングとして主体的な授業の組み立てが必要なのだなと感じた。また、自分の力だけでは難しいときには他人の力を借りる、困っている仲間が居たら共に考える、このような姿勢が対話的という言葉に当てはまるものではないかと思う。
- ・主体的・対話的で深い学びの実現にむけての授業づくりについて学ぶことができた。それなりに取り組んできたつもりではあるが、ここまで深掘りして考えたのは初めてだった。主体的・対話的で深い学びの実現に向けての授業は ①児童の価値あるつぶやきを拾う ②教師がしゃべりすぎない ③効果的な対話の場の設定 などが重要であるということに改めて気づいた。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は11月から12月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「こころの科学」（日本評論社）12月号 SPECIAL ISSUE（増刊号）

- ・メンタル系サバイバルシリーズ 「職場がアブナイ」

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）12月号

- ・特集1 「言い訳」という子どもからのメッセージ
- ・特集2 “きょうだい”の悩みや負担を理解する

「指導と評価」（日本教育評価研究会）12月号

- ・特集1 主体的・対話的で深い学びがめざすもの（3）
- ・特集2 発達支持的生徒指導

「道徳教育」（明治図書）12月号

完全保存版！ 道徳の学習過程大全～伝統的理論から哲学対話まで～

道徳が教科化されて5年（中学校）～6年（小学校）が経とうとしています。ここで、道徳教育の歴史を振り返り、教科化の意図が正しく反映されているかということについては検証が必要です。ここでは「学習過程」をキーワードとして記事を編集されています。

10頁に「学習過程ヒストリー～年代ごとにかわる学習過程の発展～ 学習過程の発展は生じた課題を克服するところから」と題して前大阪総合保育大学 藤田 善正 氏が寄稿されています。教科化される以前の道徳（「道徳の時間」、通称「特設道徳」）の歴史が60年あり、その上に立って「教科化」がありました。そう考えると、後の時代から振り返ったときに、「教科化」によって道徳がどのように変化したのか（または変化しなかったのか）が問われる大切な時期です。

昭和33年（1958年）に「道徳の時間」が始まったころの考え方について、藤田氏は 勝部 真長 氏（お茶の水女子大学）が提唱した「生活から問題を発見し、それを内面

化して判断力と心情を高め、再び生活に戻す」という指導過程を紹介されています。この記事のタイトルである「（生活から）生じた課題を克服するところから」というのは、このことだと思います。また、「道徳の時間」が始まった当時、文部省（現在：文部科学省）の教科調査官 青木 孝頼 氏らが「授業に使える教材」として文部省編 小学校・中学校 道徳の指導資料、通称「文部省資料」の冊子を策定し、「道徳の読み物資料について」という通知が文部省から発出されました。さらに学習過程として「導入段階では生活上の課題を見つめることで、ねらいとする価値への方向付けをし、展開段階では、ねらいとする価値が描かれた中心資料（読み物）を活用して追及・把握し、ねらいとする価値の一般化を図り、終末段階で高められた価値に基づいてその整理・まとめをするという三段階の展開（基本形）」を提唱しました。青木氏については4頁で 浅見 哲也 氏（十文字学園女子大学）も「今日の道徳科の学習指導過程は、元文部省視学官の青木孝頼氏の考え方が根強く残されていると言える。」と述べられています。青木氏は「自我関与」という概念も提唱されるなど道徳の基礎理論を確立されました。ただ、中学校道徳担当の教科調査官との間で「資料で教えるのか、資料を教えるのか」という論争がありました。道徳が教科化されるときに「読み取り道徳にならないように」と言われたのは、この課題が今でも続いているということでしょうか。藤田氏はさらに「『読み物資料』」を用いた『価値の内面化』を目指す授業が一般化するにしたがって、授業のワンパターン化による形骸化や『価値の教え込み』」というような問題が生じてきたと述べたうえで、1980年代半ばから起こった「モラルジレンマ」「価値の明確化」「構成的グループエンカウンター」等の指導論を紹介されています。道徳授業の形骸化についても前述の浅見氏も触れられています。「道徳科の学習指導過程が形式化されると必ず起こる問題がある。それを象徴する言葉が「形骸化」である。」と。このような歴史の上に立って、教科化された道徳ですが、藤田氏は「教科化後の道徳授業論」の中で「データ・画像中心の非連続型の新しいタイプの教材も登場しています。それらは『考え議論する道徳』『問題解決的学習』を意識して作られており」「個人あるいはグループで問題を見つけて話し合ったり、このような場合、自分ならどうするか考えを出し合ったりすることが求められます」と。このような教材の場合「青木方式」は対応しにくいのではないのでしょうか。また、藤田氏は 苫野 一徳（熊本大学教授）らの「哲学対話」「子ども主体」の授業について「学級における一部のテーマに知識や関心があってよく話ができる児童・生徒に主導された授業になっている実態も見られ、その克服が課題です。」と評されています。ということで、道徳科の「伝統的理論から哲学的対話まで」を藤田氏の記事に沿って紹介させていただきました。道徳の授業においては、誰でも、どんな児童生徒に対してもどの教材でも、どの内容項目でも通用する学習過程はないようです。伝統的理論に基づく手法では通用しないような教材が教科書に掲載されている。でも、教科書は使用しなくてはならない。最先端の哲学対話にも課題がある。要するに、道徳授業は学習過程だけではなく、道徳教育全体で考えるべきではないのでしょうか。（葎仲）

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）12月号
・特集 「働くことにつながる力」ってなんだろう？

「初等教育資料」（文部科学省教育課程課・幼児教育課編集・東洋館出版社）12月号
・特集Ⅰ 個に応じた指導の充実①
・特集Ⅱ [生活]好奇心や探究心を高める学習活動

「中等教育資料」（文部科学省教育課程課・学事出版）12月号

・特集 [中学校]各教科等を交えて語り合う③ ～学習過程の重視～

「環境 DNA」という言葉をご存じでしょうか。神戸大学の 源 利文（みなもと とし
ふみ）教授はその研究の第一人者です。本誌の「教育小景」に「教科書的には正しくないこ
とがおもしろい」と題して記事を寄稿されています。源教授が「環境 DNA」の研究を学会
に発表されたときには、誰も真剣に聞こうとはしなかったそうです。ところが新聞やテレビ
で報道され始めると真剣に聞く人が劇的に増えたそうです。源教授は、「他の人が突飛なこ
とを言い出しても、まずは話を聞いて、一緒に面白がる。そんな研究者でありたいし、若い
世代にもそんな人が増えてほしいと願う。」と締めくくっておられます。教科書には世間で
承認された多数説が掲載されていますが、新発見や新発明はそこからはみだしたところにあ
る、ということでしょうか。（葭仲）

教育科学「国語教育」（明治図書）12月号 900号記念特別号

・特集 これまでの国語教育×これからの国語教育

教育科学「社会科教育」（明治図書）12月号

・特集 社会科教育のこれから「令和の学びのスタンダード」

鳴門教育大学理事・副学長 梅津 正美 氏は 「社会科教育のこれから『令和の学びの
スタンダード』」と題して寄稿されています。これについて「Society5.0 に向けた人材育
成～社会が変わる、学びが変わる～」(Society5.0 に向けた人材育成に関する大臣懇談
会、2016年6月5日)と「学校 Ver.3.0」に言及されています。これらに対応するため
社会科教師は「AI や ICT、教育ビッグデータ等を活用した未来の学びの在り方を創造・実
践する力量」が求められると述べておられます。ただこの方向性は「脱学校化」「脱教職化」
への方向づけを強化することにもなりかねないという理由で、社会科教育の本質について論
じておられます。ズバリ、社会科教育の本質として「社会についてわかり考え、民主主義社
会の形成者としての市民に求められる資質・能力を育成する教育」つまり「社会認識教育で
あり、市民性教育」であるとのことです。ここで言う「市民」像のスタンダードについて①
「モラル」型、②「参加」型、③「公正」型に分類する方法を紹介されています。①はコミ
ュニティの価値や規範を受け入れる、②はコミュニティを改善していく、③は「コミュニ
ティの課題の表面的な原因を超えて社会的・政治的・経済的な構造を批判的に分析・検討し、
不平等・不公正を再生産する社会構造や社会関係そのものを変革することをめざす」と
のことです。もちろん社会科教育が育成を目指す「市民」像のスタンダードは③で、これに
ついて次のように説明されています。「社会正義志向が強く、社会問題を構造問題ととらえ、
不正義解消に向けた構造改革を社会に訴えていこうとする。現状改革志向で批判的思考力や
社会認識力、社会形成力を備えている。」と。社会科教育の目標となる学力（社会科学力）
を「『知識』『思考・判断』『思考技能』の機能的な連関として解釈することによって、本
質的には社会認識力と社会的判断力および批判的思考力の総体である」と規定されていま
す。この関係性について筆者が中学生を対象に実施した研究結果によると、「社会認識力・
社会判断力・批判的思考力は独立した能力ではなく、総合の関連し合う能力であること。社
会的判断力が、批判的思考力の発達の主要な促進的要因であることが明らかになった。」と
のことです。社会科教育の本質をこのように考えるならば、「未来の社会の在り方」の認識
についてケン・ブラマーの社会像に関する議論（ユートピアとディストピア）を引用し、「ど
のような未来社会を構築すべきか、その判断の根拠は何か」を問いかけています。学習方法
のスタンダードについては「探求」をキーワードとしながら、その質に着目し枠組みを仮説
的に示し（レベル1～レベル5）、整理した松原憲治氏の手法を紹介されています。探求の
レベルが上がるほど教師の関与は弱くなり、子どもの主体性は増すこととなります。著者は
無理に高いレベル（4～5）で「探求」を行う必要はないとされています。無理をすれば質
的低下を起こしかねないからだと思われます。今後について、「学校 Ver.3.0」の教育観に

立てば、社会科教育は学校だけではなく、「社会に開かれた教育課程」（企業や NPO、その他多様な地域社会が提供する探求型・プロジェクト（課題解決）型の学習活動等）との連携が重要であるとされています。

※ケン・ブラマー（イギリスの社会学者：著書「21 世紀を生きるための 社会学の教科書」ちくま学芸文庫など）

※松原憲治（国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部総括研究官）

（葭仲）

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）12 月号

・特集 DX への対応、授業スタイルの転換を軸に捉え直す